

特集：2010年度日本数学会出版賞受賞者のことば

室井和男著「バビロニアの数学」

日本数学会出版賞をいただき誠に有り難うございます。私は内定の通知を受けたとき、推薦して下さった方と拙著を通じて知り合った数学者の方々のためにも出版賞を辞退すべきではないと判断しました。

バビロニア数学の研究分野は、忌憚なくいえば、ノイゲバウアーとサクスの死後、一流の研究者がおりません。アッカド語をほんの少しだけしか勉強していない人、シュメール語の知識が全くない人、そして数学が怪しい人たちが英語の論文や本を書き、言語的にも数学的にもおかしな俗説を流布しています。さらに、これらを「数学史家」と称する人たちが、間違いの拡大再生産をおこなっているのが現状です。たとえば、通史本のバビロニア数学の項は、今のところ、信頼できるものは内外ともありません。私は、このような状況をなんとか打開したいと、自分の能力の限界を認識しつつ、努力を続けています。それは受賞の有無とは関係のない私の決意であります。このたびの出版賞は日本数学会からの私に対する激励と考え、改めて感謝したいと思います。

古バビロニア時代の書記は、次のように述べています。

木の心より出たものは、木の心によって知られる。

ここの「木」とは、ことによると、「英知（シュメール語でゲシュトゥグ）」の隠語かもしれません。ゲシュトゥグを構成する3文字の最初の文字は、「木」を表すからです。たとえば、数学粘土板 Plimpton 322 上の三角関数表を理解できる書記はごく少数であったのでしょうか。しかし、必ず理解できる人がいるという確信が上の格言の含意と思われます。私は、古代の数学者の心を現代の数学者の心へ伝える橋渡しの仕事をしたいと思っています。

室井和男